

日本マレーシア研究会の新しい発足にあたって

日本マレーシア研究会会長 立本成文*

10年以上も前に、日本マレーシア研究会 JAMS は始まった。そのきっかけは、科学研究費補助金でマレーシアの調査を続けていた水島司さん、菱口善美さんたちが永田淳嗣さんなどの若い人々と続けていた勉強会であるという。その人たちが中心になって日本マレーシア研究会を作るにあたって、この調査チームより古くからマレーシア研究にかかわっているものが日本にもいて、それを無視するのはまずいということで、堀井健三さんと小生がシンボリックなキャップに据え付けられた。私としては、最初の立ち上げをお手伝いするという趣旨であったのが、研究会の居心地よさにほだされて、そのままずると代表のような形が10年以上も続いてしまった。現役でばりばりのマレーシア研究者でもなく、他の学会の大会にはほとんど参加していない小生が唯一毎年参加するようにしていたのはこの研究会だけである。その間に、菱口さんも、堀井さんも、あるいはマレーシア臨地研究の第1世代である萩原さんも鬼籍に入られてしまった。そして研究会の参加者も多くなり、楽しくて厳しい勉強会のスタイルも変わらざるを得なくなったのは致し方ないことかもしれない。その新しい JAMS には、新しい会長がふさわしいと思っていたが、新しい選挙制度のもとで、会長に選ばれることになり、大変名誉なことであると感激するとともに、新しい会長としてどうしたら良いのかという当惑の感も否めない。当座は、今までのように、誰が会長であっても、JAMS は JAMS の道を歩むという会であってほしいと勝手に願っている次第である。

さて、どのような方向に JAMS は向かうのであろうか。それは、これから会員の皆様が作り上げていくことであろうが、私はその要になるのは運営委員会でなければならないと思っている。運営委員会主導の新しい学会であって欲しい。

勉強会の時には特にテーマを設定したりすることなく自由に発表をしていますが、その発表に対する質疑応答のなかで、マレーシア研究は斯くあるべしという、学問に対する姿勢・ハビトゥスが自然と養われていたように感じた。それが魅力でもあり、楽しみでもあった。しかし参加者が多くなると、これを明示的にしない限り、普通の学会発表と同じように食堂のメニューのサンプル陳列になってしまう。これではせっかく研究会を作った甲斐がないというものである。ありきたりの学会になることを避けるために、最初の10年の精神を受け継ぎながら、運営委員会が新しい展開を画策する原動力となって欲しいということである。運営委員会に期待するものは大きく、会長としてもその方針をできるだけサポートして、会全体にその方針が定着するように努力したい。

会の名称は日本マレーシア研究会と従前どおりのものとなっているが、私個人としては、このマレー

* 中部大学大学院国際人間学研究科長

シアは国名を指すものとして受け止めておきたい。国という実体を研究対象にしなければならないというのではない。国というマレーシアを研究のフレームにしようということである。岩田慶治流に言えば、額縁である。額縁の研究ではなく、その中に入って自分なりの絵を描かねばならない。そのときに、フレームを意識することにより、より良い絵が描けるのでなければ、フレームを設定する必要がない。分析・総合の補助道具としてのフレームである。したがって、研究内容に制限をつけるものではないし、フレームの外からフレームを見るのも良いし、フレーム自体を批判の対象にすることもできる。要はフレームにこだわると言うことである。

このフレーム問題と関係して、マレーシアの研究会か、マレーシア研究会かと言う微妙な違いも指摘できる。政治経済の分野以外では、マレーシア国内におけるアカデミズムは、**Malay studies**に象徴的に見られるように、「マレーシア研究」をあまり認めてこなかったように見受けられる。外部のものとして、それに異議を唱える形で、マレーシア研究を積極的に言うのも意義があると思う。しかし、一番大切なのは、日本人のための情報提供だけではなく、マレーシアに何らかの形で還元・周流させていく努力が今後の JAMS 会員には求められていることを会員としては決して忘れてはならないということである。額縁の中の入って行って描いた絵はみんなに鑑賞してもらってはじめて価値を持つ。

このように書いていくと、マレーシア研究ということをもっと論じたい誘惑にも駆られるが、一応以上をもって、会長就任の挨拶としておきたい。